

ティグラン・サイアン客員研究員

アルメニアは世界で最も歴史の古い国のひとつです。地理的には、アルメニア高地の北東、コーカサスと西南アジアの間に位置しています。さまざまな災害のうち、アルメニアで最も多く発生しているのが地震で（全体の94%）、その他の災害は6%にすぎません。アルメニアでの大地震は、紀元前18~15世紀から発生しており、マグニチュード(M)6.5の735年に起こったVaick地震、906年に起こったM7.0のVaiots-Dzor地震、1679年に発生したM7.0のGarni地震などがあります。中でも非常に悲劇的で破壊的だったのは、1988年12月7日に起きたSpitack地震でした。国土の40%が被害を受け、25,000人が亡くなり、53万人が家を失いました。



Spitack地震の教訓として、地震災害軽減の戦略と国土の災害管理システムは、国家の安全のために必要不可欠の分野であることが認識されました。こうした災害による被害を軽減し、国民を強大な地震から守るため、1991年7月17日、アルメニア共和国政府のもとに国立地震防災研究所(NSSP)が創設されました。アルメニアNSSPの組織は、中部・南部・北部の3つの地域に分かれており、私は南部地域で、様々なタスクを持ったチームで編成される作業部会の部長として勤務しています。この作業部会は、緊急の際に実際に具体的な作業を行うことによって、災害による被害を軽減することを、主たる活動目的としています。

アジア防災センターは、設立以来アジア地域の被害想定、被害軽減や災害管理の分野での調整の役割を果たしてきました。また、ADRCはメンバー国と理論的な知識を共有することはもとより、災害関連の分野について学び、それを実践に移すことを支援する機関だと思います。1ヶ月前にADRCに来て以来、1995年1月17日に起こった阪神淡路大震災の復興を支援するための「フェニックスプラザ」、被災地の復興のために積極的に活動している長田のTMOというNGOなどを訪問しました。災害前と後の被災地の実際の様々な様子を観察し、比較することができました。被災地の復興への努力の進行状況を目のあたりにできる良い機会に恵まれたと思います。

また、ADRCの研究者と共有するために、アルメニアの災害管理について紹介する機会も持ちました。私は、防災、災害への備え、災害対策、復興と復旧、地震災害への対応について学びたいと思っています。そのためにも、日本の最近地震が発生した地域をいろいろと訪れてみたいと思っています。ADRCでの経験は、私が国に戻ったときにきっと私の仕事、またアルメニアNSSP、そして災害対策や管理に関わるアルメニア政府やNGOにとって役立つものとなることと思います。

(Tigran Sayiyan, Head of Task Force, Armenia NSSP)